

第3回「民族共生の象徴となる空間」における民族共生公園（仮称）基本構想検討会
議事概要

■日時：平成27年1月16日（木）14：00～16：00

■場所：札幌第1合同庁舎2F講堂

■出席委員（五十音順、敬称略）

愛甲哲也、浅川昭一郎、内田祐一、加藤忠、坂井文、佐々木利和、戸田安彦、野本正博

■議事要旨

【象徴空間全体の検討状況について】

- 博物館ゾーン周辺は地質調査の結果、軟弱な地盤層であることが明らかとなった。東日本大震災以降、地震や津波への備えが注目されるようになったこともあり、博物館の位置についても今後検討を進めていく必要がある。
- 博物館の位置が決まらないと、公園機能の検討が進まない。地盤改良により対応できるのではないか。山側の地盤は固いのではないか。
- 山の近傍で行ったボーリング結果でも地盤はよくなかった。
- 建物の位置はゾーン分けにも関わってくるが、公園基本構想としてどう考えるのか。
- 公園の基本構想はどのような性格を持った公園とするかの理念や方向性をまとめるもの。

【基本構想の検討について】

- 「自然から贈り物を大切にする」という言葉は文章としては分かりにくい。様々な自然の恵みそれぞれが「カムイ」であり、このような自然観が、現代社会において環境や共生を考える上で重要なポイントとなる。
- 基本方針 1)「水の神の魂が宿るとしてきたポロト湖」の表現について、水自体がカムイ、神様であり、ポロト湖だけに水の神が宿るわけではないので適切ではない。
- 「イオルが実感できる」、というのはイメージがつかみにくい。「アイヌの人々が利用してきた自然を体感」とした方が表現として良い。
- イオルというのは、基本的に生活のための狩猟域、漁猟域のことである。イオル再生事業はアイヌの人々が生活に必要としていた素材を再現、採取できる場をつくっていくという構想であり、イオルばかりを強調するのは適切でない。
- 公園の中でイオルが完結するわけではないので、広い範囲で捉えた上でイオルの概念をどこかで入れられないか。
- 基本方針 2) について、最初の段落がオリンピック・パラリンピック、次にアイヌ民族と他の民族との交流という流れになっているが、一段落目と二段落目を入れ替えた方が良い。象徴空間の背景として大事な意味を持つのはアイヌの交流の歴史である。
- ポロト(大きい)とポント(小さい)がすぐ近くで体現できる地形が今でも残っているところは多くなく貴重である。また、ヨコスト湿原は地域にとって重要な湿原であり、この湿原を十分に活かすことを意識した表現を考えて欲しい。
- 象徴空間の基本構想には6つの機能と3つのゾーンがある。6つの機能の中には、博物館が担う

機能があるが、その他の機能について、公園の基本構想の中でどのように位置づけられているかが分からない。

- 「古くから和人とアイヌの交易地として交流が行われており」の表現について、交易を交流と同義としてよいかは疑問。交易と交流の違いについてはきちんと整理をし、記載した方が良い。
- 空間構成の方針に「ポロト湖畔の東側に「伝統」、西側に「現代」を体現」とあるが、明確には分けられないのではないか。「奥に行くにつれ自然観を感じられる空間構成」という表現も精神的な言い回しであり分かりにくい。
- 既存の博物館、温泉施設等も一般の人が利用しているのでそちらへの配慮も必要であり、今後に向けて検討願いたい。
- 動線の考え方について、バリアフリーだけでなくユニバーサルデザインで考えていくということが重要。
- 空間構成の方針の書きぶりはもう少し整理できるのではないか。今の案ではそれぞれがゾーンの説明になってしまっている。最初に全体計画として、必要な役割、機能を書くことよいのではないか。その上で、もう少し具体的に書くという構成にするとよいのではないか。
- 3つの基本方針を受けける形で空間構成の考え方を整理すべきではないか。イメージ図には2つの軸も書かれており、それも踏まえて基本方針に基づいてどのような空間構成にするかという書き方にすべきではないか。

以 上